

丸裸にされた
イチロー!
野村の最高機密を独占公開



1995
Baseball
Final

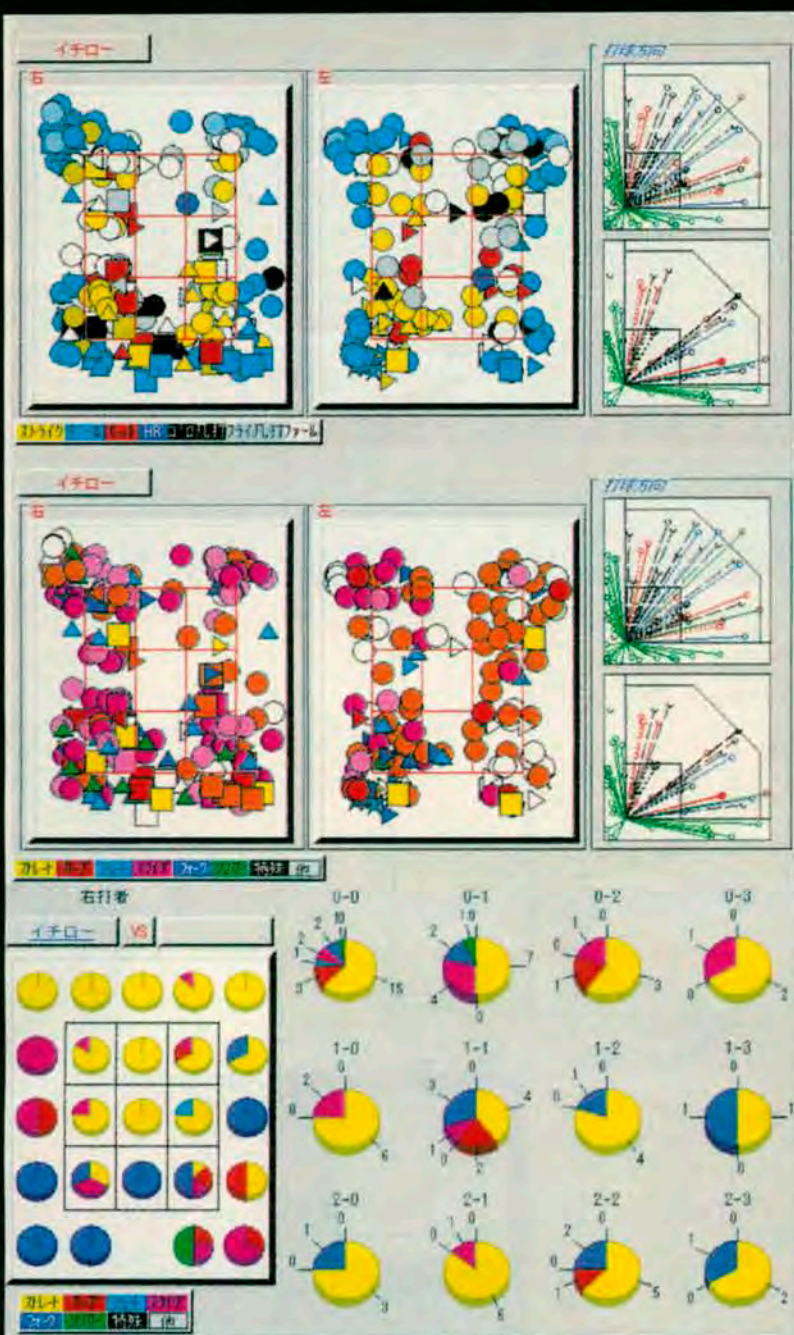
石田雄太=文
text by Yuta Ishida

谷田一郎=イラストレーション
illustration by Ichiro Tanida

野村監督の唱えてきたID野球がどれほどものなのか。この日本シリーズでは、稀有の天才打者を相手にして、そのデータ解析力が世間の注目を浴びることとなった。野村ID野球の申し子、古田敦也対イチロー。グラウンドでは至近距離に立つ二人の対決が、このシリーズ最大の見所と言われた。日本シリーズがひとりの打者とひとりの捕手との対決で語られるなど、前代未聞のことだった。

徹底したミーティングで、イチローをどう丸裸にしたのか。どんなデータを集積したのか。ヤクルトが日本一に輝いたのは、野村監督の戦い方にある意図があったからだ。その意図を導き出したのが、〈データ〉である。

左の図④は、今季のイチローの公式戦の〈データ〉の一部である。配球図はネット裏から見たもので、右投手と左投手とで別々に表示されている。上の図と下の図は、同じ配球図を、目的によって違うカラーチャートで表示している。上の図からはどのコースをヒットし、どのコースを凡打したかが、色分けでわ



センター側から見た日本シリーズでの、イチローに対する古田の配球意図が一目瞭然と読み取れる図④。左のカラーチャートでは高めに直球、低めに変化球という傾向がはっきりわかる。右のチャートでは0-1、0-2、1-1での変化球の割合が目立ち、逆に追い込んでからは、直球で勝負した。球速は、黄と赤の境目が130km。左右5kmごとに色分けされていてピンクの斑点は145km以上



かり、下の図からは○がストレート、□がフオークボール、△がカーブといったようにいろいろな球種で攻められたかが斑点の形状と色でわかるようになっていいる。さらに、そのボールを打った時の打球方向も表示されている。実はこの〈データ〉が、日本シリーズでおおいに活用されていたのである――。

日本シリーズを終えた今、ひとつの定説が出来上がっている。それは「イチローは古田のインハイ攻めにやられた」という図式。しかし改めて古田のイチローに対する配球と結果を見てみると、必ずしも「インハイ」を攻めていたわけではなかった。それは、図④以下に示された、ヤクルト投手別の攻略記録を見てもわかる。こちらはセンター方向から見た配球図だが、上の図が球速別のカラーチャート、下の図が球種とその結果がわかるカラーチャートである。これを見ても、むしろイチローは野村監督と古田が仕掛けた「インハイの幻影」によって狂わされてしまった。その秘密を解くカギは、思わぬところにあった。

東京・四谷の住宅街。ここに、日本シリーズの行方を左右した「情報発信基地」があったのだ。普通の一軒家の一室で、今季のイチローを始めとする、様々なオリックスのデータが集められ、3名の男が日夜、パソコンとビデオの前で、データの集積をしていた。彼らは、「アソボウズ」と名乗る集団だった。

代表者は片山宗臣(48)。歌舞伎のカツラ職人だったという、都立高校軟式野球部の元監督だ。そして、パソコンを操るのは黒羽展久(29)。野球の経験はまったくない、文系大卒の元システムエンジニア。そして、関東一高の遊撃手で9番打者だったという行木茂満(21)。球種を見抜くことに関してはプロ野球のスコアラームも一目置く存在である。

彼らは何者か――ただの野球好きにしてはマニアックすぎる。しかし、趣味が高じてこれだけのシステムを作ってしまったことも確かだ。彼らは簡単に言えば、野球のスコアブックをパソコンに入力することで、多角的な分析用のデータを、瞬時に表示できる、そう

いうシステムを作り上げた集団である。「野球のスコアラームの仕事は、パソコンを使った方がはるかに合理的だと思ったことがきっかけだった。野球のスコアをパソコンに入力して、希望の条件を入力すれば、様々なデータが集積、解析されて表示される。実戦で活用できるまでに、2年がかかったかな」

そう話す片山の発想を、黒羽がプログラミングして、行木が実戦で活用した。この画期的なスコアリングシステムは、口コミでプロ野球の各球団にも知れ渡っていった。

「アソボウズ」と名付けられたそのシステムには、あらかじめ12球団の全選手が登録されている。そして、一人一人の名前をクリックしてオーダーを組み、一球ごとにスコアをつけていく。試合中のすべてのプレーを、ホームランから凡打、球速、球種、牽制球まですべてクリックして入力していく。例えば球種は、ストライクゾーンがパソコン画面に表示されていて、どのコースの、どんな種類の球かを入力できる。打球方向もグラウンドを表

示する画面があり、どの位置へ打球が飛んだのか、すべて入力できる。つまりプロ野球のスコアラーが集めるデータを、パソコンの一面に瞬時に入力できるのである。

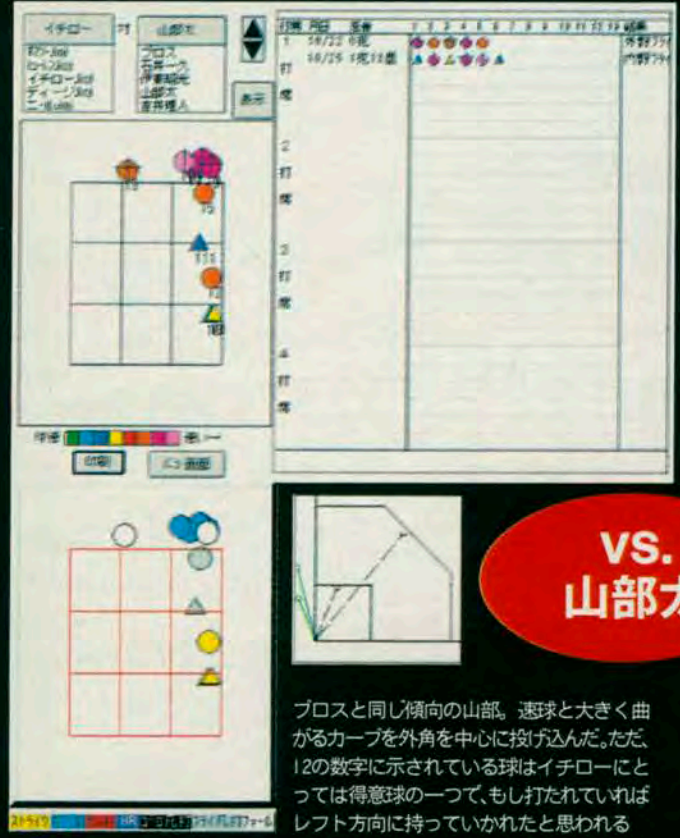
このシステムの魅力は、欲しい情報を、瞬時に、ビジュアルに提供してくれるところにある。情報を蓄積すれば、その分だけ信頼度は高まり、傾向がつかめる。実際、趣味で始めたこのシステムは、まだ商売にしていけない段階で、早くもひっぱりダコの状態。今季はバレンタイン監督がこのシステムの存在を聞きつけてきたので、ロッテにシステムを無償提供していたほど。神戸でオリックスの優勝を阻止して、今季2位に躍進したロッテには、△アンボウズ△のデータが大きな力となっていた。片山はこのシステムの国際特許まで取得し、現在もセの数球団が導入に動いている。

実は、このシリーズ直前に、彼らの存在を知っていたTV局が、今年1年間のイチローのデータ集積を依頼、その存在を知ったヤクルトが、データの提供を申し入れたのである。

「趣味の延長がどのくらい役立っているのかわからなかったけど、プロの実戦でどのくらい生かせるのかはすごく興味があった。我々は、こういうデータはどうだろうか、と思いついて、それを集積、表示しているだけ。そういうデータをどう生かすかは各球団のノウハウだから、今回の日本シリーズで野村監督がこれをどう解析するのかとても楽しみだった」

このデータが、野村1D野球の貴重な資料となった。彼らの集めた今季のイチローのバツティングデータからは、ヒットを打ったコースや凡打したコース、ファウルしたコースや見逃したコースがわかる。これで得意なコースと苦手なコースは一目瞭然。さらにこのヒットゾーンはストロークを打ったのか、そのスピードは145km以上だったのか、130km程度なのか、変化球ならそれはカーブか、スライダーか、フォークか。どのコースを打ったら、打球はどの方向へ飛ぶのか、これらをすべてビジュアルな映像で表現している。

丸にされた



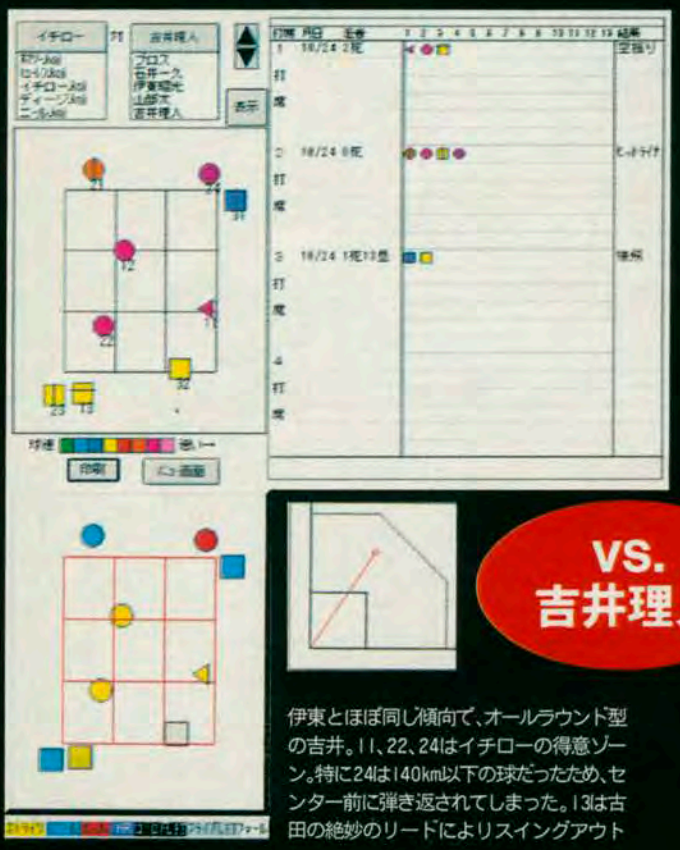
VS. 山部太

プロスと同じ傾向の山部。速球と大きく曲がるカーブを外角を中心に投ぎ込んだ。ただ、12の数字に示されている球はイチローにとっては得意球の一つで、もし打たれていけば左方向に持っていかれたと思われる



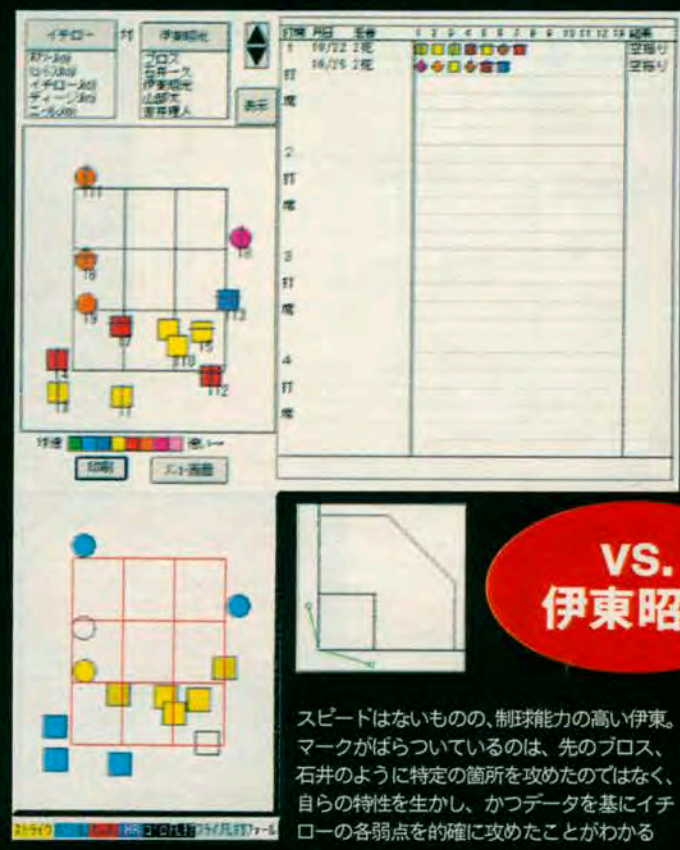
VS. 石井一久

キレのある変化球を得意とする石井。外角低めいっばいの変化球を中心に攻めたことが見てとれる。特に外に逃げるカーブ、及びスライダーを多投した。14の直球は本当なら胸元を突く球のつもりだったが死球になった



VS. 吉井理人

伊東とほぼ同じ傾向で、オールラウンド型の吉井。11、22、24はイチローの得意ゾーン。特に24は140km以下の球だったため、センター前に弾き返されてしまった。13は古田の絶妙のリードによりスイングアウト



VS. 伊東昭光

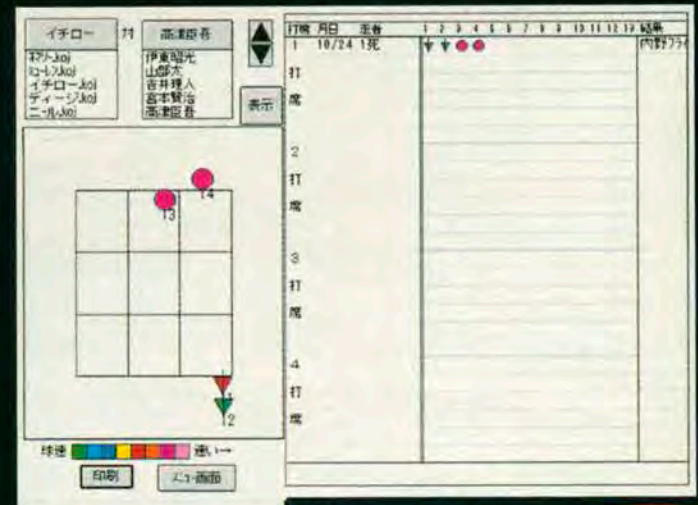
スピードはないものの、制球能力の高い伊東。マークがばらついているのは、先のプロス、石井のように特定の箇所を攻めたのではなく、自らの特性を生かし、かつデータを基にイチローの各弱点を的確に攻めたことがわかる

ヤクルトはこれほどまでに、緻密で詳細なデータを入手していたのである。

この他にも、(アンソボウズ)は、オリックスのブロックサインや球種のサインを、ほぼすべて解読していた。スコアリングシステムの入力データと、ビデオで撮影した映像をリンクさせ、読み取ったのである。これもパソコンだからこそ、短期間で可能だった。例えば第4戦の小林とオマリーの壮絶な14球の名勝負は、二塁走者の橋上ヘルメットと顔をさわって、オマリーに一球一球、ストリートかスライダーかのサインを送っていたし、送りバントやヒットエンドランのサインもわかっていた。古田がウエストして走者を刺した同じ第4戦の4回表のケースなど典型的。もちろん、古田がそのデータをすべて咀嚼してグラウンドで活用でき、かつ捕手としての能力が高いからこそ実を結ぶのであるが、こういう側面もヤクルトの強さの一因だった。

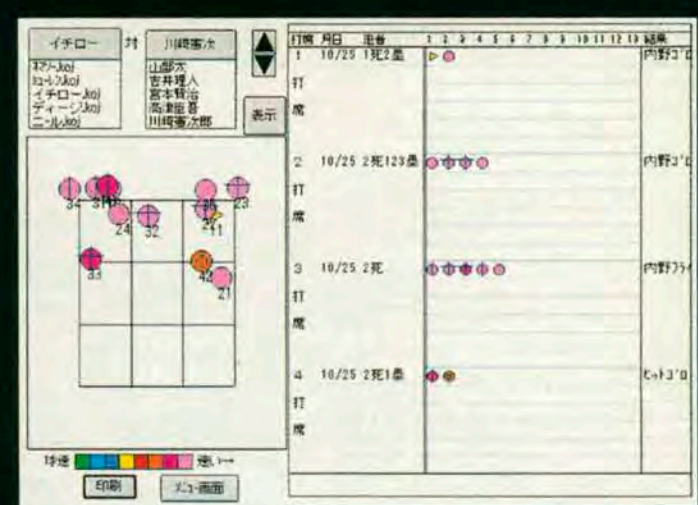
ヤクルトはシリーズ直前の10月15日から合宿に入り、ミーティングを繰り返した。打者であれば、どのコースにヒットゾーンがあるのか、打てないコースはどこなのか。打球方向にはどういう傾向があるのか。投手ならば初球はどのコースに、どの球種で入ってくるのか。カウントを悪くしてしまつたら、どの球種で、どこにストライクを取りにくるのか。このデータに、スコアラーが集めた情報を加

ロー



VS. 高津臣吾

サイドスローの高津はイチローにとっては打ちやすい投手。それだけに配球には最大の注意を払い、初球から2球続けて外角低めのシンカー、そのあと外角高めの速球で勝負した。やつのことでバットを当て、結果は内野フライ



VS. 川崎憲次郎

プロスと同じ傾向の川崎。データに基づいて、徹底的に高めのボールゾーンを速球で攻めた。疲れが出始めた7回、集中力を欠いて投げた42は、ゾーン、スピードともイチローの得意球だったため、ライト方向に打たれてしまった

えて、野村監督が分析したオリックス対策は、すべて見やすい表にして、ヤクルトのクラブハウスに貼られていた。投手ごとに大きな紙が一枚ずつ作られ、全カウントごとにこのコースにどの球種が多いかが、カラフルな円グラフを使った配球表で、すぐわかるようになっていた。第5戦で初登板した高橋功一などは、カウントが0-3の時は外角のストレ

ート、1-3の時には内角のストレートで百パーセント、ストライクを取りにくるし、0-1あるいは1-1の時には、ほぼ7割は変化球で攻めてくるなど、配球パターンはすっかり解読されていた。初めて顔をあわせる投手でも、その攻め方は、すでに手に取るようにわかっていたのである。

さらには佐藤のヨシボールは、ボールだから手を出さない。星野にはクセがあつて、ストレート系は先にグローブが立つが、変化球は両手が一緒に胸の前にくる。小川はストライクゾーンの見極めが甘く、速いウエストボールで三振が取れるなど、数え上げたらキリがないほどの情報をヤクルトは集めていた。そして野村監督が、シリーズを左右するともっとも警戒していたイチローへの対策。ヤ

山際淳司の本

Junji Yamagiwa

最新刊 発売中
定価1500円(税込)



自由と冒険のフェアアウェイ

まず遊び、心ありき。その原点に立ってゴルフを楽しもう

ゴルフは心を解きはなつ大人の遊びだ——世界のフェアアウェイをめぐる、知られざるエピソードを軽妙に綴る、ベストゴルフエッセイ。急逝した著者の遺著にして豊饒な名著

中公文庫 好評既刊



定価 520円(税込)



定価 600円(税込)

中央公論社

〒104 東京都中央区京橋2-8-7
振替00120-4-34 電話03-3563-1431

情報提供/機アソボウズ

クルトのスコアラーム陣は、△アソボウズ△のデータに、様々なルートから集めた情報を加味して、野村監督に報告を入れていた。

◆すべての球を、目的意識を持って投げる。すべてを勝負球だと思ふこと。ボール球にも手を出してこなくて、ストライクゾーンをやや広めに考えて投球する。

◆最も強いのはインローを中心に、中途半端な低め。緩い球は得意、ただし続け球は厳禁。

◆次のゾーンは、長打の危険。Aゾーンへの速い球。Bゾーンへの緩い変化球。Cゾーンはすべての球種が危険。

◆有効な攻め方は内角高めのストレート。外角高めの速い球。内角への速いスライダースは詰まり、インローに落ちる球は空振り。

外角低め変化球は一、二塁間のゴロになる。

この分析を基に、野村監督は次の4つの球を使ったイチロー攻略ゾーンを割り出した。

①高めのボールゾーンの速い球

②外角低めいっばいの変化球

③内角の速い変化球

④内角低めに落ちる球

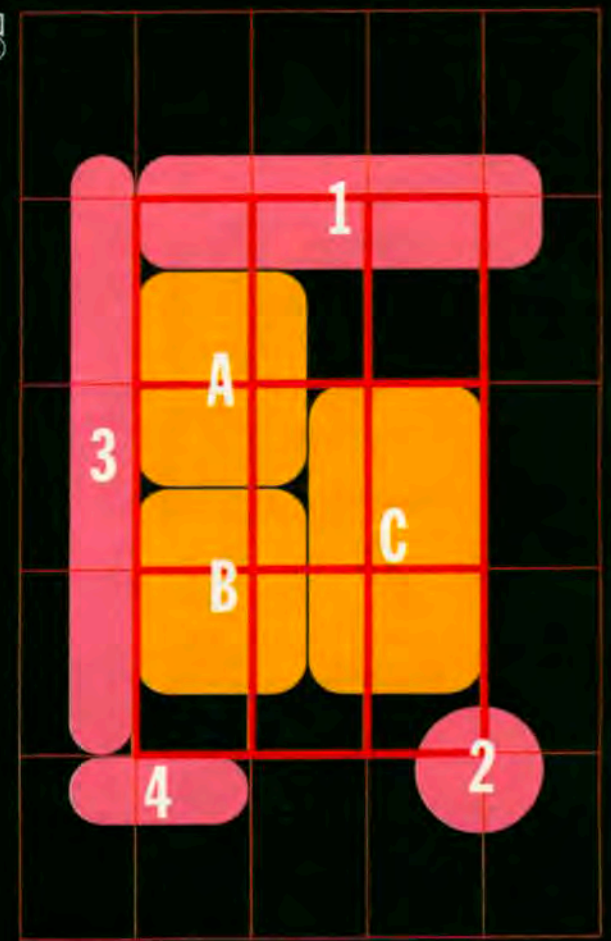
(図◎)

ここには、インハイへの攻めはない。つまり、インハイという、どの打者も嫌がる看板を掲げて、その先のイチローの弱点を突こうとしていた。その弱点をより露呈させるための心理的なプレッシャーを与えたのが、「インハイ攻め」というプロパガンダだった。

実際、マスコミを利用して意識の中に内角攻めをすり込ませるために、再三、イチローを挑発した。曰く、「イチローを攻めるには、内角に始まり内角に終わる。いかにインハイを攻め切れるか」。曰く、「バッターボックスから足が出るとどう違うか。完全に出たら、アウトか」。イチローが打席に立つまでに、野村監督はこれだけの下準備をしていた。

データがあっても、分析ができ、選手に伝えられて、それをグラウンドで生かせるだけのレベルの高いチームは少ない。

その成果はどうだったのか。例えば第1戦



図◎

でのブ罗斯は、イチローの第1打席です。2つの有効な球を試している。①の高めのボールゾーンの速い球と③の内角の速い変化球。ボールゾーンの速い球を試すには、ブ罗斯の速球がベターだと、第1戦に持ってきた野村監督。そして、古田はすぐに手応えをつかんだ。ダイエーの工藤公康は、「イチローはバットコントロールが巧いからローボールヒッターのように思われるけど、本当は高めが好きなんだ。少しくらいのボール球でも、高めには手を出してくる」と話していたが、

実際、「アソボウズ」のデータでもその傾向は明らかに出ていた。高めのボールゾーンでのファウルがかなり多く、空振りも目立っていた。また、打球方向でも、センターの真正面には飛ばない、レフトへの打球はスライドする、というデータから左中間を大きくあけ、逆に右への強いゴロが多いために一塁手と二塁手は、かなり狭く守った、など、データによる極端なシフトも敷いていた。

古田は、イチローに対しては、見事なまでに時をみて、人を見たリードをしていた。各投手に要求したパターンは、タイプによってはっきり異なっている。①の速い直球を持つブ罗斯、川崎には高めの直球。ブ罗斯には③

これがイチロー攻略チャートだ。①高めのボールゾーンの速球。②外角低めいっばいの変化球。③内角の速い変化球。④内角低めに落ちる球。逆にヒッティングおよび長打にされる危険性の高いゾーンは、④ゾーンの速球、⑥ゾーンの緩い変化球、⑦ゾーンのすべての球種

クを直球では取りにいかないという、イチローのデータに基づいた古田の配球には、明らかに意図があった。

このシリーズ、イチローが大事な場面で抑えられたのは、彼が「インハイの幻影」によって崩れた結果、ヤクルトが掴んでいた弱点を、はつきり露呈してしまった結果なのである。ではイチローはどこが崩れていたのか。

まず、内角高めを意識したイチローは、ミットした時に、しっかりと両腕を伸ばせるように、ややカカトより体重を乗せた。さらにイチローは振り子を小さくして早くボールを見極め、内角高めにも対処しようと考えた。しかしその方法に工藤公康はクビを捻った。「振り子を小さくすると、いつものタイミングよりも、踏み込む足の着地が早くなる。そうすると、タイミングに合わせるために一瞬足が止まり、その時右肩がパツと開く。イチローは左足から右足を軸を移動させて打つが、その時、右肩が開かないから、バットのヘッドが残ったままインパクトの瞬間、強いスイングができる。それが、足が止まり、右肩が開き、ヘッドは残らない、では、強い打球が飛ばないのも当然だった。

天才打者は、目に見えない幻影と、目に見えた弱点を突かれて敗れた。データは確かにイチローの弱点をいくつも指し示していた。オリックスはヤクルトの緻密なデータ分析によって、サインも配球も解読され、長所も弱点も知り尽くされていた。しかしそれはデータを集めるシステムと、データを解析できるノウハウがうまく噛み合った結果である。片山は、データが日本シリーズで重用されたことについて、こう言った。

「単体だと言う人もいるかもしれないが、勝つためには、データは大切な道具になる。道具は、使う人間が初めて役に立つ。データがあってもそれを分析できて、選手に伝えられて、それをグラウンドで生かせるだけのレベルの高いチームは少ない。それがヤクルト、いや、野村監督だったのかな。」